

コドリリングの侵入警戒調査 (その1)

コドリリングはヨーロッパ原産種で、わが国と朝鮮半島を除く南北両半球の温帯地域に広く分布し、リンゴ、ナシなどバラ科果樹の重要な害虫である。

わが国では本虫の侵入を防ぐため、植物防疫法によって発生国のリンゴ、ナシ、モモ、サクランボなど本種の寄主となる生果実の輸入を禁止している。また、1983年からは性フェロモンを利用したトラップを全国の主な海空港やリンゴを栽培している道県に設置してコドリリングの侵入警戒調査を行っている(本誌11号参照)。

幸いこれまでにコドリリングが誘殺されたことはないが、1987年7月に青森県のトラップで本虫によく似たヤナギサザナミヒメハマキが発見され、これがコドリリングではないかと関係者を驚かせたことがあった(本誌24号参照)。

このため、横浜植物防疫所はコドリリングの侵入警戒調査を実施している道県病害虫防除所の協力を得て、1988年から1990年にトラップで採集された蛾類を送付してもらい、それらの識別法の検討を行ったので、その概要と侵入警戒調査時にコドリリングトラップで捕獲された蛾類とコドリリングとの見分け方について2回に分けて紹介する。

1988年から1990年に各地のトラップで捕獲され、送付されてきた蛾類を横浜植物防疫所において外

部形態の特徴から分類した。その結果、ハマキガ科をはじめヒロズコガ科、ホソガ科、スガ科、マルハキバガ科、イラガ科、メイガ科、シャクガ科、ドクガ科、ヒトリガ科、ヤガ科、トラガ科の12科に分けられ、種類は100種以上に及んだ。

コドリリングと同じハマキガ科ヒメハマキガ亜科に属するもの277頭については、交尾器を取り出

し詳しく調査したところ、その種類数は16種であった。このうち全国的に数多く捕獲されたヒメハマキ類は、イッシキヒメハマキ(182頭)とトビモンシロヒメハマキ(41頭)で、この2種で80%を占めていた。また、話題になったヤナギサザナミヒメハマキは東日本のトラップで9頭捕獲されていた。

性フェロモンを利用したトラップには、目的とした種類だけが誘引されるのが理想であるが、今回の調査で侵入警戒調査用トラップにコドリリング以外に多種類の蛾類が捕獲されることが判明した。このような事例は、海外のコドリリングトラップや現在発生予察などに使用されている鱗翅目フェロモントラップにおいても知られている。その原因については

トラップの色や形態、トラップを設置した周辺の環境などが影響していると考えられるが十分解明されていないようである。

(以下次号に続く)



コドリリングトラップ



イッシキヒメハマキ

ヤナギサザナミハマキ



コドリリングの幼虫(左)と成虫(右) ニュージーランド